

明日への伝言



▲防災講座の様子（岩切地区）

第4回 仙台市地域防災リーダー（SBL）

市では、平成24年より地域防災の担い手を育成する目的で「仙台市地域防災リーダー（SBL）養成講習会」を実施。地域に応じた防災計画の策定や防災訓練の企画立案など災害予防の中心的役割を担い、災害時には住民の避難誘導や避難所運営、救護・救助活動の指揮を行っています。694人が登録（4月現在）。

※ SBLの募集については、16ページをご覧ください

地域での自助・共助の取り組みやSBLの活動などについて、佐藤亜矢子さんにお話を伺いました。

自分がその時にできることを

活動の原点は2度の震災の経験にあるという佐藤さん。26年前の阪神・淡路大震災は大阪府で経験し「全国から大勢のボランティアが神戸に向かう中、臨月の自分は何もできないという無力感を感じていました」と話します。その後、引越した福島県で、お世話になった託児ボランティアの方から「いつかあなたができるときにできることをやったらいいんだよ」と伝えられたことが、今の活動の原動力になっていると振り返ります。

仙台に引越し、高森東小学校のPTA会長を務めていたときに東日本大震災が起こり、町内会長と一緒に避難所運営に携わりました。各地の甚大な被害状況が明らかになるにつれて、自分たちの地域は自分たちで何とかしなければならぬという共助の思いを強くしたそう。NPOが主催する「女性のための防災リーダー養成講座」に企画から参加し、



平成25年にSBL養成講習会を受講。二入、なし食から取り直し、梅干しや漬物、常備食や非常食の試食、防災訓練の非配置、非常食の配りなどについて行

さらに平成26年に防災士の資格も取得しました。「救援物資のニーズの把握や乳幼児・高齢者への配慮など、女性のきめ細やかな視点が避難所運営には必要です。意見を届けるだけでなく、決定する場に女性が一定数いることも大切」と力強く話します。

現在は、SBLとして町内会と協力しながら、地域の実情にあった自主防災計画の作成や実践的な防災訓練などに取り組んでいます。また、今は新型コロナウイルスの感染対策という新たな課題にも向き合っています。「コロナ禍でも災害は起きます。どのように避難所を開設し、運営するのか事前に決めておく必要があります」と佐藤さん。感染予防と安全な避難の両立を目指しています。

日常生活の延長線上にある防災

高森東地区で婦人防火クラブが中心となって力を入れているのが、身近にある材料で簡単に作れる非常食「サバ・メシ（サバイバル飯）」。ガスや電気が止まっても、工夫次第でバランスの良い食事ができることを知ってほしいと「アルファ米を使っ

た切り干し大根の炊き込みご飯」などのレシピを考案し、啓発に努めています。備蓄用の専用品を準備するだけでなく、災害時にも活用できるものを日常的に使っていくことを提案し、防災を特別なこととしてではなく、日常生活の延長線上に考えてほしいという佐藤さん。「まちづくりも同じで、日頃からお互いの顔が見える関係性があれば、災害時も助け合える。人と人とのつながりが災害に強いまちをつくります」。近所であいさつしたり、町内会の行事に参加したり、そんな積み重ねがいざというときに自分を助け、地域の共助の力になると話します。

最近では、乳幼児の母親を対象とした防災講座で、参加者の半数以上が他県からの転入者など東日本大震災を経験していないことも。今後、世代交代が進む中で、経験や思いを共有し、伝えていくことが課題です。「日本各地でさまざまな災害が起こっています。それを一人一人が自分ごととして考えることが大切。災害が起こるたびに『想定外』と言われるのが、想定外のことが起こるのが災害。その認識に立って、自助・共助の大切さを次の世代へ伝えていきたい」と未来へつなげたい思いを語ってくれました。



▲佐藤さん